

平成30年度鶴見大学仏教文化研究所公開シンポジウム

東日本大震災の経験から学ぶもの —災害・いのち・こころ—

講演資料集

主 催

鶴見大学仏教文化研究所
鶴見大学先制医療研究センター

会期： 平成30年6月9日（土）13時30分～

会場： 鶴見大学会館地下1階メインホール

タイムテーブル

会 場	鶴見大学会館地下1階メインホール（神奈川県横浜市鶴見区豊岡町3-18）	
13:00~	開場・受付	
13:30~13:40	開 会	
	開会の辞 大山 喬史（本学学長・本研究所所長）	
13:40~14:20 <small>（講師紹介を含む）</small>	基調講演 木村 清孝（本研究所・特別顧問） 「仏教者としての私の学び」	
時 間	講 師	題 目
14:20~14:50 <small>（講師紹介を含む）</small>	井川 裕覚 <small>（真言宗僧侶・臨床宗教師）</small>	「3.11後の死生学～生者と死者をつなぐ～」
14:50~15:00 休 憩 （10分）		
15:05~15:35 <small>（講師紹介を含む）</small>	池内 龍太郎 <small>（神主・臨床宗教師・医師）</small>	「東日本大震災から学んだこと」
15:35~16:05 <small>（講師紹介を含む）</small>	勝村 聖子 <small>（本学歯学部・准教授）</small>	「私たちの使命と人との繋がり」
16:05~16:20 休 憩 （15分）		
16:20~16:50	パネルディスカッション&質疑応答 木村清孝・井川裕覚・池内龍太郎・勝村聖子 司会 前田 伸子（本学副学長・本研究所研究員）	
16:50~16:55	閉会の辞 佐藤慶太（本学先制医療研究センター主任・本研究所研究員）	

仏教者としての私の学び

鶴見大学仏教文化研究所特別顧問
東京大学名誉教授

木村清孝

2万人を超える死者・行方不明者を出し、現在も心身の病に苦しむ多くの人々を抱える東日本大震災から7年が過ぎ、これをきっかけとして誕生した臨床宗教師の方々をお迎えして、改めてこれに学ぶとする機会をここにもつことができた。まことに意義深く、先ずは関係者の一人として、ご参加くださった先生方をはじめ、開催の諸準備に当たられた皆様に衷心より謝意を表したい。

さて、本日、私に与えられた役割は、仏教者であり、仏教研究者でもある私自身の経験と知識にもとづいて主題について概観し、この場を皆様とともに、その有益な学び直しができる機会とすることである。どこまでそれが実現できるか心もとないが、その役割を全うすべく努めていきたい。

講演の流れは、以下になるだろう。しかし、時間の都合もあり、途中、省略させていただくところが出てくるかもしれない。この点、お許しいただきたい。

I 被災地を訪れる

- ① 実現までのいきさつ
- ② 子供たちとともに

II 仏教における災害の見方

- ① 自然災害と人的災害
- ② 宇宙観・自然観・社会観
須弥山説 三千大千世界 『華嚴経』の蓮華蔵世界 有情と無情 「山川草木悉皆成仏」 社会観の弱さ 国家/権力者の捉え方—王法と仏法の間
- ③ 「大隋劫火」の禅話が示唆するもの

III 失われたいのちに向き合う

- ① 感謝する～供養する～往生、成仏を念ずる
- ② 災害の科学的分析と適切な対処
- ③ 死者の願いに思いを馳せる～死者・未生者との共成意識

IV 残された者のいのちとこころ

- ① 適切な医療上のケア
- ② 安らげる場の確保
- ③ 精神医・カウンセラー・宗教者の協力と協働
- ④ いのちとこころを深く知る～無常のいのちの自覚と新たな生への決意

結語

3.11 後の死生学～生者と死者をつなぐ～

井川 裕覚 (いかわ ゆうがく)

【講師略歴】

高野山真言宗 歓楽寺 住職
関東臨床宗教師会 副代表・事務局長
日本臨床宗教師会 認定臨床宗教師
上智大学大学院 実践宗教学研究科 博士後期課程

【講演抄録】

「あたしだけどうして生き残ったのよ。目の前でお父さん流されていったの。助けてって、それがお父さんの最後の言葉だった。どうしてあたしだけ…」

石巻市の仮設住宅に住むその高齢女性は、涙を堪えながら震える声で訴えかけた。

「お坊さん、津波でこんなに街をめちゃくちゃにされて…本当に神様、仏様いるのかい？いるなら、どうして助けてくれなかったの？あたしには、さっぱり分からないわ」

2011年3月11日14時46分18秒——宮城県の東南東沖130kmを震源とする日本周辺における観測史上最大の大地震と津波によって、一瞬にして故郷は破壊され、多くの人々の生命は失われた。2018年3月時点での震災による死者・行方不明者は1万8,434名、建築物の全壊・半壊は合わせて40万2,699戸が公式に確認されている。あまりの被害の大きさに、圧倒的な自然の脅威の前に……私たちは声を失い、無力さを噛みしめることとなった。

そして、それは被災者のみならず、やがて日本社会全体に大きな変化をもたらすこととなる。

「あの時、向こう側——“死”に選ばれてしまった人と、こちら側——“生”に取り残されてしまった人とを分けたのは偶然に過ぎない。我々は皆いづれ死を迎える。その時に備えて一体何を考え、どう生きていけばよいのだろうか」

誰もが被災者に哀悼の意を示し、その祈りは、自ずと“いのち”への問いかけへと発展していく。また、死を前にして、“いのち”の儂さと尊さを身にしみて感じることとなる。

では、そのような事態に対して、果たして宗教者はいかに関わったのであろうか。被災直後から、現地の宗教者たちが中心となって積極的に支援活動に乗り出し、人々に救済の手を差し伸べていく。被災地で聞かれた幽霊譚や、とても解決しようのない実存的な“いたみ”に対し、彼らはどのように向き合ったのか。様々な立場や宗教・宗派を超えて活動した「心の相談室」や「カフェ・デ・モンク」の経験は、その後の宗教者の支援活動の規範となり、「臨床宗教師」の養成が始められる。

そして、それらの経験は、やがて「実践宗教学」という新たな学問領域へと連続していく。宗教への理解を基礎に置きながら、「宗教の公共性」「死生観・生命倫理」「グリーフケア」など幅広い視点で現代の死生学的課題への取り組みが行われている。このような課題に対し、宗教はいかに取り組み、問題を解決していくのか。「実践宗教学」では、実践の現場に即しつつ歴史に問いかけることで、その意義を捉え返す試みである。

本発表で、3.11後のパラダイムシフトを経て、臨床宗教師の実際を踏まえながら、特に宗教者の役割やその支援のあり方がいかに展開してきたかを確認した上で、3.11後の死生学について考えたいと思う。

私たちの使命と人との繋がり

勝村 聖子

鶴見大学歯学部・法医歯学准教授
歯科医師・博士（医学）

【講師略歴】

- 2000年3月 鶴見大学歯学部卒業
- 2004年3月 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科司法医学分野修了
- 2004年4月 鶴見大学顎機能研究センター ポストドクター
- 2005年4月 鶴見大学歯学部解剖学講座 助教
- 2009年4月 鶴見大学歯学部法医歯学 助教
- 2015年4月 鶴見大学歯学部法医歯学 講師
- 2017年4月 鶴見大学歯学部法医歯学 准教授 現在に至る

【講演抄録】

2011年3月11日午後2時46分。皆さんはどこで、誰と、何をしていたのでしょうか。あの日の出来事は鮮明に記憶に残っていることと思います。そしてあの瞬間、被災者の多くの方々が、予期しなかった突然の「死」や「別れ」に直面することになりました。

私は法医学を専門とする歯科医師として、発災3日目から被災地の遺体安置所で支援活動を開始しました。これまで多くの遺体を見てきた経験がありましたが、安置所となった体育館一面に処狭しと並べられたご遺体を目前に、足が竦む思いがしたことを今でも覚えています。私たち歯科医師の使命はご遺体のお口の中の状態を正確に記録し、生前の情報と照合しながら身元を確認すること、1日も早くご家族の元にお返しすることでした。一方で、遺体安置所には、行方不明者を探す家族、大切な方を亡くしたご遺族も多くいらっしゃいます。そして彼らの心情は「そっとしておいてほしい」「遺体をこれ以上傷つけないでほしい」という思いです。自分たちの使命を果たすべき責任を感じると同時に、ご遺体にどう接するべきなのかを改めて考えさせられました。また被災者やご遺族にどう向き合うべきなのか、私たちの言動が不快な思いにさせたり、傷つけたりしていないだろうか。これらは活動期間中、絶えず問い続けていたことです。そして不思議なことに遺体安置所は、人が支え合って生きていることを実感できる場でもありました。

東日本大震災を通して私が経験したことを会場の皆様と共有することで、「いのち」や「こころ」、「生と死」について見つめ直すきっかけとなれば、幸いに存じます。

鶴見大学仏教文化研究所 主催
平成30年度公開シンポジウム講演資料集
「東日本大震災の経験から学ぶもの―災害・いのち・こころ―」

発行日 2018年6月9日

編集・発行 鶴見大学仏教文化研究所

〒230-8501 神奈川県横浜市鶴見区鶴見 2-1-3

E-mail: bukken@tsurumi-u.ac.jp